



東埼玉総合病院受付



地域糖尿病センターのスタッフたち。(前列左が中野氏、右は院長の高井氏)



駐車場で見かけたメッセージ。こんなところにも病院の考え方が示されている。



院内に掲示されている糖尿病の地域連携先リスト。

「最初のうちは、患者を見放すのか」などと言われましたが、限られた医療資源を分け合っていくためには、地域住民の理解がどうしても不可欠です。二人主治医制は、病院と診療所が協力して地域で患者さんを支えていくシステム。電車の優先席と同じように、もっと状態が悪くて専門的な医療が必要な人のために、病院で治療を受ける機会をみんなで譲り合う、というように理解していただいています」(中野氏)。

に全国初の厚生労働省認可を受けた。「社会医療法人になると税制上の優遇措置が受けられるのですが、より公益性の高い事業展開が求められます。準公的な立場にたつて、地域の患者さんとうまく向き合っていくのを考えたい時、一つの病院ではどうにもならない、地域を守るためには開業医の先生方や住民にも協力していただくことが必要だということに気づきました」

ヒューマンネットワークの構築からスタート

同病院が最初に取り組んだのは、高

井院長の専門分野である糖尿病医療の再生である。利根医療圏はもとも県内で三番目に糖尿病専門医が少ない地域。さらに基幹病院の糖尿病外来が休止に追い込まれ、一時は約千二百名にのぼる患者さんが通院先を失うという事態が発生していた。そこで同病院は、地域の糖尿病医療の推進役を担う拠点「地域糖尿病センター」を開設した。同センター担当の中野氏がまず着手したのは、ヒューマンネットワークの構築である。「開業医の先生方が出席する研究会や懇親会には必ず出向き、地域の診療所を訪問して、地域医療再生の必要性

を詳しく説明しました。ネットワークを構築するといっても、地域の実情に合ったものでなければ意味がありません。そこで、休日を利用して地域全体をくまなくまわりました。住宅街があるかと思えば、その先には田園地帯が広がっています。町の元気度も、ずいぶん違います。実際に足を運ぶことで、地域の感覚をつかみました」(中野氏)。

地域連携糖尿病プログラムと二人主治医制

限られた医療資源を有効に活用するために、同病院では、糖尿病教育入院、



社会医療法人 ジャパンメディカルアライアンス
東埼玉総合病院
埼玉県北葛飾郡杉戸町

人を活かし、人と人をつなぐ病院
社会医療法人として地域医療再生の原動力に

高齢化が急速に進む一方で、医師不足が深刻化し、医療崩壊の危機に直面する地域は少なくない。そんななか、開業医や住民と一緒に、地域全体で医療を支えていく仕組みづくりを奔走し、活路を見出した病院がある。糖尿病分野で取り組んできた事業の数々は、多くのメディアに取り上げられ、全国のモデル的存在として注目を

集めている。その立役者である東埼玉総合病院院長の高井孝二氏、地域糖尿病センターの中野智紀氏に、地域医療再生の極意を聞いた。

社会医療法人として
地域医療への貢献を模索

東埼玉総合病院は、東武伊勢崎線・日光線の東武動物公園駅から徒歩で約十五分のところにある。人口十万人対医師数の割合が全国で最も少ない埼玉県なかでも、特に少ない地域として知られる利根医療圏(県北東部十四市町)に位置している。地域には大学病院も公的病院もない。病床数百九十三床のこの病院が、中核病院としての役割を果たしている。

高井氏が院長として就任した当時、地域医療は崩壊寸前の危機にあった。「周辺の病院が相次いで廃業し、町全体の活気も下がっていくなかで、社会医療法人という立場で地域にどう貢献できるのかを考えました」社会医療法人とは、二〇〇七年の第五次医療法改正で創設された新しい法人格。救急医療など公共性、公益性の



海老名総合病院

高い事業に一定以上のレベルで取り組むとともに、経営面での透明性や永続性などの基準を満たした法人が認定される。社会医療法人 ジャパンメディカルアライアンスは、東埼玉総合病院や、神奈川県東部の東武東上線の地域医療支援病院として専門医療、救急医療を担っている海老名総合病院、その他多数の施設で構成されている。特定医療法人時代から、長期優先債務格付けでBBB+を取得するなど優良法人としての実績が認められ、二〇〇九年四月

フットケア、栄養指導、インスリン導入など、診療所では実践が難しい医療を共同提供できる仕組みをつくった。地域連携バスを用いた三泊四日の教育入院の場合は、病院の外來を通さずに直接利用することができる。

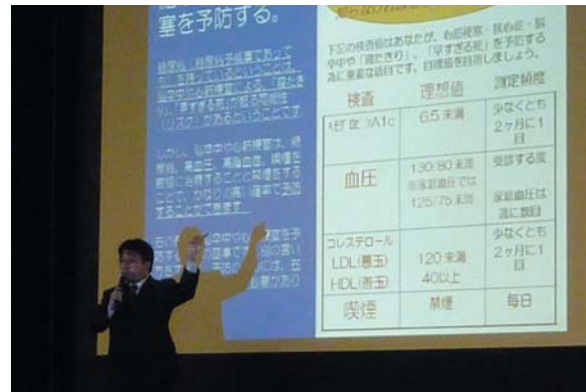
「当院では、糖尿病療養指導士(CDE)による専門的なケアが行えますし、患者さんへの教育のノウハウも持っているのです。安心して患者さんを受け入れることができます。利用者は月平均で約八人、その約四〇%が連携バスを用いた開業医からの紹介です」

また、病院と診療所が役割分担をする二人主治医制も導入した。両者が決めた治療計画に基づいて、症状の安定した患者さんは診療所で、重症患者さんは病院で診る仕組みだ。診療所に通院している患者さんも、症状が悪化した時には、予約なしで病院での診療を受けることができる。

コミュニケーションをキーワードとした地域住民への教育

地域医療再生には住民の理解が不可欠だ。同院では、一、二カ月に一回のペースで市民公開講座を開いている。医師が講演する健康講座はよくあるが、中野氏のやり方はそれとは異なる。「参加者にどんどんマイクを向けて住民の声を聞く、話し合いの場になっています。最初は嫌がられたり、「医師はもっと努力しろ」などと一方的に怒られることもありましたが、回を重ねるごとにだんだん住民の皆さんも理解してくれるようになってきました」

患者さんに行動変容を促すために、その成果を具体的にわかりやすく示すことも忘れない。



地域住民を招いて定期的に行われている市民公開講座。

「糖尿病のコントロールをきちんと行い透析を予防できれば、杉戸町にとって年間十二億円の税金の節約になります、というふうにデータで示すようにしています」

中野氏の教育のベースになっているのが、行動医学と教育心理学である。明確な動機付けを行い、現実的で実行可能な目標設定をして、それを確実に継続していくためのサポートを行う。一方的な指導ではなく、ここでも人とのつながり、コミュニケーションがキーワードになっている。

栄養指導を担当する管理栄養士も、最初はひたすら患者さんの話に耳を傾けることから始める。信頼関係を築き指導を行うことで、実際に病状が改善していく患者さんが多いという。また、指導の前には必ずBMIを測定するだけでなく、体重計に乗った素足を見ながら、体脂肪率を測定する。また、けがやカサカサなどの症状に気づけば、フットケアの看護師に橋渡しをするという。スタッフ同士もしっかりとつながっているのである。

NPO法人の設立、病院的の移転、新規オープン。今後の地域医療への取り組み

昨年末には、地域糖尿病センターを中心に、医療従事者が組織や職種を超えて交流し、勉強する「埼玉利根医療圏糖尿病ネットワーク研究会」が発足。初会合には、病院や診療所の医師、看護師、薬剤師、栄養士、理学療法士など約百名が参加した。

今春にはNPO法人「地域医療を育てる会」の設立も目指している。タウンミーティングや市民公開講座だけでなく、学校などに出向いて子どもへの医療教育にも取り組んでいきたいのだという。

「小学校で基本的な交通ルールを教える交通安全教室があるでしょうか？それが医療にも必要だと思っんです。子どもの時から、医療とどうかわかってい

けばよいかを学ぶ機会があれば、軽いケガで救急車を呼んだり、風邪で夜間救急外来に駆け込むような患者さんも減るのではないだろうか」(中野氏)。

また、同病院は二〇二一年度末に移転、新規オープンの予定で準備を進めている。

「規模は拡大できませんが、広域医療を行うためにはもう少しアクセスしやすい場所に転じて、駐車場も広く取りたいと思っています。職員へのアンケートも行っているので、みんなの意見を取り入れて、働きやすい病院にしたい」(高井氏)。

最後に、病院内で紹介したい設備があれば撮影したいと申し出ると、「ぜひスタッフを撮ってください」と笑顔で答えてくれた高井院長。高度先進機器ではなく、そこで働く人々を推薦してくださる姿に、人と人をつなぐ地域医療の本質を垣間見た思いがした。



社会医療法人 ジャパンメディカルアライアンス
東埼玉総合病院 院長
高井孝二氏
(たかい こうじ)

社会医療法人 ジャパンメディカルアライアンス
東埼玉総合病院

所在地：埼玉県北葛飾郡杉戸町清地2-2-11
☎0480-33-1311

http://www.jinai.jp/www-saitama/

開設：昭和48年9月

院長：高井孝二

診療科：内科・循環器科・外科・整形外科・形成センター
外科・脳神経外科・皮膚科・泌尿器科・眼科・耳鼻咽喉科・リハビリテーション科・放射線科・麻酔科・埼玉脊椎脊髄病センター、消化器病センター

病床数：193床

外来患者数(1日あたり平均)：392.5人(2008年度)

入院患者数(1日あたり平均)：124.5人(2008年度)

年間手術件数：1,269件(2008年度)

平均在院日数：14.4日(2008年度)

紹介率：20.6%(2008年度)

職員数：常勤208名、非常勤150名
(2009年3月31日現在)